

# オンライン授業での高大連携シナリオ教材 「マイリスpektヒーロー・ヒロイン」の活用

## Utilization of My respect Hero and Heroine scenario teaching materials

宮下 伊吉\*<sup>1</sup>  
Kichi MIYASHITA\*<sup>1</sup>  
\*<sup>1</sup> 三重大学

\*<sup>1</sup>Mie University  
Email: imiyashita@ac.mie-u.ac.jp

あらまし：本稿では、高大連携講座におけるシナリオ教材の役割について、オンライン授業で取り上げ、大学生による考察を試みた。その結果、「興味を持てる教材」であり、「やる気」になる工夫があったとの結果を得ることができ、高校生の興味関心が高かったことを裏付けることができた。

キーワード：高大連携、シナリオ教材、オンライン授業、主体的な創造活動、ゴールベースシナリオ

### 1. はじめに

本稿では、先行研究<sup>(1)(2)</sup>で明らかになった学習者主体で能動的な学習に適した問題解決型のアプローチとして適切と確認されたGBS(Goal-based scenarios)に基づき、初等中等教育におけるシナリオを用いた学習者主体で能動的な学習の実践結果で学習効果が示された事例の手法<sup>(3)(4)(5)</sup>を参考に、高大連携講座で高校生向けのシナリオ教材を開発し、その役割について、オンライン授業で取り上げ、大学生の視点から考察を試みた。

### 2. 教材の概要

本稿で扱うシナリオ教材は、2019年7月、著者が所属する大学にて実施した高大連携講座におけるシナリオ教材「マイリスpektヒーロー・ヒロイン」である。教材の目的は、学習者である高校生の社会・世界との関わりへの関心を高めることであり、できるだけ講義をしないで(教えないで)、教材のみで実現をめざした。

対象となる高校生(2年生)は、M県内のA高校の協力を得て、17名が講座当日に大学に集合した。事前にワークシート(図1)を配布し、各自がリスpektするヒーロー・ヒロインをあげ、その特徴などを記載させた。

私がリスpekt (respect) するヒーロー・ヒロインは、 「 <input type="text"/> 」(名前)です。	
どんなヒーロー・ヒロインですか？ あなたがリスpekt (respect) するヒーロー・ヒロインの特徴は？ (2つまで)	ヒーロー・ヒロインのどんな点をリスpekt (respect) していますか？ (2つまで) ※あの人のようになったら(行動出来たら)と尊敬(大事に)している具体的な点
上記のヒーロー・ヒロインにとって最も困難なミッション※を想定してください。 ※最大の敵(ライバル、ラスボス)との闘い、未解決事件・トラブル、突如出現した謎現象など	上記のミッションに直面した時、ヒーロー・ヒロインならどう行動すると思えますか？
ヒーロー・ヒロインがミッションをクリアできず、どうなるか(またはキーアイテム)は？ ※どのキーアイテムのどのような助けによって、ヒーロー・ヒロインがミッションをクリアできるかを想定ください。	ヒーロー・ヒロインが上記のミッションをクリア(完結、終了)できたら、どのようなハッピーエンドになりますか？
ヒーロー・ヒロインが上記のミッションをクリア(完結、終了)できると、どのようなハッピーエンドになりますか？	ヒーロー・ヒロインが上記のミッションをクリア(完結、終了)できなかったら、どのようなハッピーエンドになりますか？

図1 事前ワークシート

講座では、最初に著者より全体の進行説明(10分)のあと、3~4人ずつのグループに分かれ、持参した事前ワークシートに記載の各自のヒーロー・ヒロインを互いに紹介しあい、そのヒーロー・ヒロインが力を合わせて取り組むミッション(「地球の危機を救え」)に関する資料が入ったタブレット端末(iPad)をグループに1台ずつ貸与し、グループ毎にミッションを解決するストーリーを考え、発表を行った。発表は、予めタブレット端末にインストールしておいた無料動画作成アプリの使用を指示した。(図2)



図2 タブレット端末で無料動画作成アプリ使用例

### 3. 受講者(高校生)の評価

受講者(高校生)からは、94%(17名中16名)が今回の講座に興味を持てたとの回答を得た。(図3)

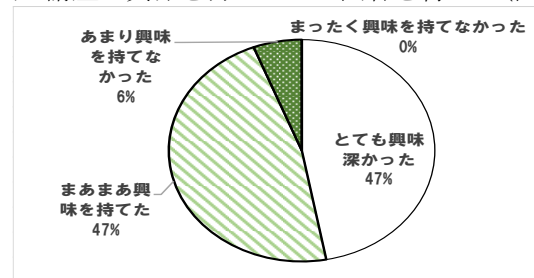


図3 高校生が興味を持てた割合 (n=17)

興味を持つことができた理由は、「自分たちが尊敬するヒーローから地球の問題について考えるという発想がすごいと思った」「こんな事を考えた事がなかったので、貴重な体験ができた」等、今までにない発想や考えに触れることができた点などであった。

#### 4. 大学生からの評価

本稿作成時（2020年5～6月）、著者が所属する大学の前期授業はすべてオンラインで実施中であり、著者が担当する教養教育科目「現代社会理解実践(学習意欲の理論と実践)」の授業もオンラインで8名の学生が受講中である。その8名にも、今回の高大連携講座のシナリオ教材を体験してもらうために、事前ワークシートに各自のヒーロー・ヒロインについて記載してもらい、教材への評価を指示したところ、次のような結果を得た。(図4)

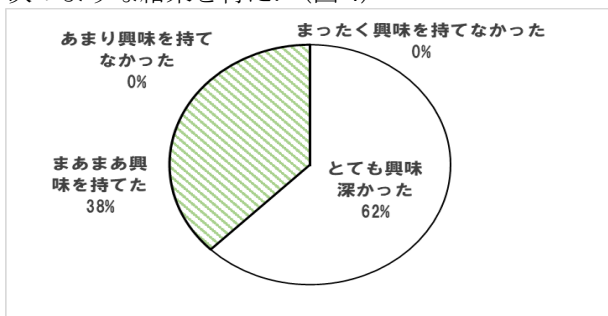


図4 大学生が興味を持てた割合 (n=8)

特に高校生が「やる気」になる工夫があった点として、「ミッションが単純で分かりやすかった」「自分自身のヒーロー・ヒロインについて考えた点」「教材の中の語句の親しみやすさ」「取り組みやすい課題とグループワーク」「ワークシートが工夫して作成されていた」があげられた。ただし、「高校生は何をめざしたらよいかわかって取り組めていたか」という点では、8名中1名のみが「はい」との回答であった。「地球の危機を救え」というミッションが与えられていたので、講座で何をすべきかは、はっきりしていたが、何のための講座だったのかということが高校生には分かっていなかったのではないかと評価であった。

#### 5. GBS理論との関連

学習者主体で能動的な学習には問題解決型のアプローチが適し、学習者自身による目標や課題の発見・選択を前提しているPBL (Project Based Learning), AL (Active Learning) 等のアプローチに対して、設計者が意図した学習目標達成のプロセスを学ぶGBS (Goal-based scenarios) に基づいたアプローチ(シナリオ教材やストーリー型カリキュラム)が具体的なスキルを学ぶ上で適切であることが先行研究から確認されている<sup>(1)</sup>。

GBS理論には、7つの構成要素(使命、カバーストーリー、役割、学習目標、シナリオ操作、フィードバック、情報源)がある。(図5)その1要素の学

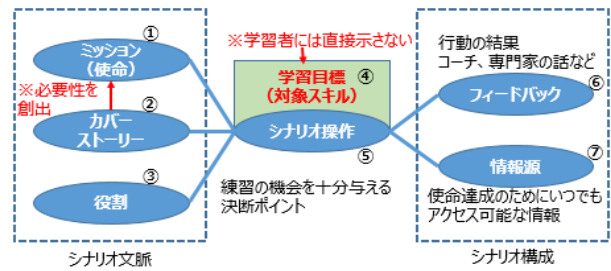


図5 GBS理論の7つの構成要素<sup>(2)</sup>

習目標は、学習者に直接示すのではなく、カバーストーリーから創出された使命(ミッション)を学習者に提示するとしている<sup>(2)</sup>。今回のシナリオ教材「マイリスpektヒーロー・ヒロイン」に取り組んだ高校生には、身につけるべきスキルなどの学習目標は明示せず、自分が尊敬する存在(ヒーロー・ヒロイン)が、他の人のヒーロー・ヒロインと協力しあい、地球の危機という困難なミッションを解決するストーリーを楽しみながら考えるという主体的な創造活動を体験してもらうことを主目的に教材を開発した。

#### 6. 今後の課題

本稿では、「(自分が尊敬する存在=)学習者の自己概念が反映する存在」を学習者同士で認めあう協働創作活動のプロセスとワークシートによる工夫が、高校生の「やる気(=主体的な創造活動)」につながったことを大学生の評価から確認することができた。しかしながら、今回の結果だけで、高校生の興味関心が高まったことを裏付けることはできない。

著者が昨年実施した別の高大連携講座(SDGs探究MAPを使って)では、学習目標を明示したワークショップ形式で、受講者(高校生)の興味関心が高まったという結果がでた(5件法による評価、最高点5点中4.7)<sup>(6)</sup>。今後の高大連携の中でシナリオ教材の活用を広げ、さらなる検証を行っていきたい。

#### 参考文献

- (1) 根本淳子・鈴木克明編:「ストーリー中心型カリキュラムの理論と実践」, 東信堂, 東京 (2014)
- (2) 根本 淳子, 鈴木 克明: “ゴールベースシナリオ(GBS)理論の適応度チェックリストの開発”, 日本教育工学会論文誌, 第29巻, 第3号, pp.309-318 (2006)
- (3) 小松裕貴, 村松浩幸, 今村貴之: “GBS理論に基づいた中学校技術科におけるシナリオ型環境ゲーム教材の開発”, 信州大学教育学部研究論集, Vol.4, pp.1-13 (2011)
- (4) 西村和貴, 下村勉, 須曾野仁志: “ICTを用いた能動的な学習「青い目の人形とミス三重」の実践的効果の検討”, 日本教育工学会論文誌, 第36巻, pp.129-132 (2012)
- (5) 山元有子, 向後千春: “シナリオ作成を伴ったロールプレイング授業が批判的思考態度に及ぼす効果”, 日本教育工学会論文誌, 第37巻, pp.33-36 (2006)
- (6) 宮下伊吉: “SDGs探究MAPを使った高大連携セミナー”, 日本教育工学会全国大会 2020年度春季大会論集, pp.313-314 (2020)